

経産婦における助産所出産選択の意思決定要因と出産体験の分析

Analysis of Factors which Influence Decision Making on Selecting the Maternity Home and the Childbirth Experience in the Multipara

宇都弘美*・川畑由佳子**

Hiromi Uto, Yukako Kawabata

*鹿児島女子短期大学 **いちご助産院

抄録：研究目的は経産婦の助産所出産選択の意思決定要因を明らかにすることと、出産体験を分析することである。A助産所出産を選択し研究協力の得られた経産婦3名を対象に、半構成式面接を妊娠中及び出産後の2回（1名は出産後のみ）実施した。内容は逐語録を作成し質的帰納的に分析した。結果、助産所出産を選択した要因には、前回出産時の【病・産院の医療に対する疑問】から【助産所に関する情報】を収集して、自らが【思い描く出産】の実現場所として主体的に助産所出産を選択していた。出産体験の振り返りでは、妊娠期からの助産師と築いた良い関係をもとに【助産師への信頼】が生まれ、主体的に出産することで【自信】が持て、助産所でのゆったりとした時間は、【家族との良い関係・時間】をもたらしていた。また、女性たちの発言からは、食事やアメニティなどの【助産師のこだわりに対する共感】が感じられた。これらのことが【出産の満足感】に繋がっていた。

Key words：助産所出産、助産師、出産の満足感、こだわり

I. 緒言

我が国における出産場所は1950年では約96%が自宅・助産所¹⁾であったが、その後病院や診療所といった施設に移行し、2013年現在、助産所出産の割合は0.8%で、自宅出産の0.2%を加えても自宅・助産所出産の割合はわずか1%である。

このような状況の中ではあるが、一部の女性たちは出産に関しての自分のニーズに応じてくれる場として助産所出産を選択している。助産所での出産を選択する女性は、出産そのものに対する自分の明確な意思を持ち^{2~3)}、病産院で出産した女性よりも満足度が高く^{3~4)}、豊かな出産体験をしている^{5~6)}ことが先行研究で明らかにされている。

そこで、本研究の目的は、分娩を取り扱う有床助産所が県内に4カ所といったB県内の一助産所であるA助産所での出産した経産婦の助産所出産選択の意思決定要因を明らかにすることと、助産所出産の体験を分析することである。

II. 研究対象及び方法

A助産所出産を選択し、研究協力の得られた経産婦4名を対象として、助産所内若しくは研究参加者の自宅にて、半構成式面接を妊娠中及び出産後の2回実施した（1名は

出産後のみ面接）。その内、今回は前回までの出産場所が病院・診療所であった3名を分析対象とした。

面接内容は逐語録を作成し、質的帰納的に分析した。尚、本研究は大学倫理委員会の承認後実施し、研究参加者には書面で同意を得た。

調査内容は、助産所での出産を選んだ理由、助産所の助産師に受けたいケアとケアを受けた感想などである。

調査期間は、平成25年12月9日から平成26年3月3日までである。

III. 結果

1. 対象者の背景

研究参加者の平均年齢は37歳であった。今回を除く出産の経験は1～2回で、前回まではいずれも病・産院での出産であった。

2. 助産所出産選択の意思決定要因（表1）

分析の結果、A助産所での出産の選択に繋がった理由は、18のサブカテゴリーと3つのカテゴリーで構成された。

文中ではカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >で表す。

A助産所での出産の選択に繋がった理由として、経産婦は前回出産時の【病・産院の医療に対する疑問】から【助産所に関する情報】を収集して、自らが【思い描く出産】の実現場所として主体的に助産所出産を選択するという出産に対するこだわりを持っていた。

以下、カテゴリとそれぞれに含まれるサブカテゴリを示す。

1) 病・産院の医療に対する疑問

【病・産院の医療に対する疑問】は、＜医療行為の結果への疑問＞＜医療行為の否定＞＜病院でのケアシステムへの疑問＞＜バースプランとの相違＞＜出産準備クラスへの不満＞の5つのサブカテゴリから構成された。

2) 助産所に関する情報

【助産所に関する情報】は、＜出産した知人からの情報＞＜助産所自体への興味＞＜HPを見て＞＜助産所の見学をして＞の4つのサブカテゴリから構成された。

3) 思い描く出産

【思い描く出産】は、＜自然に産みたい＞＜布団の上で産みたい＞＜家族の立ち会い出産をしたい＞＜生まれてくる子どもの力を信じて産みたい＞＜入院期間の短縮等の融通が利きそう＞＜自分の力を信じて産みたい＞＜民間療法的なものに興味を持って＞＜医療行為をしない＞＜思い出に残る出産をしたい＞＜家族みんなで子どもを迎えたい＞＜夫や子どもに臍帯を切ってほしい＞の11のサブカテゴリから構成された。

3. 助産所出産の体験の振り返り (表2)

分析の結果、助産所出産の体験の振り返りは、19のサブカテゴリと5つのカテゴリで構成された。

助産所出産の体験の振り返りでは、妊娠期からの助産師と築いた良い関係をもとに【助産師への信頼】が生まれ、主体的に出産することで【自信】が持て、助産所でのゆったりとした時間の流れは、出産前後の【家族との良い関係・時間】をもたらししていた。また、女性たちの発言からは、食事やアメニティなどの【助産師のこだわりに対する共感】が感じられた。これらのことが【出産の満足感】にもつながっていた。

以下、カテゴリとそれぞれに含まれるサブカテゴリを示す。

1) 助産師への信頼

【助産師への信頼】は、＜助産師の対応に満足＞＜助産師のケアはイメージ通り＞＜安楽ケアに満足＞＜1人の人(助産師)にすべてを相談できた＞の4つのサブカテゴリ

から構成された。

2) 自信

【自信】は、＜産む力があつた＞＜今までも順調だったし、赤ちゃんも元気に違いないと思った＞の2つのサブカテゴリから構成された。

3) 家族との良い関係・時間

【家族との良い関係・時間】は、＜家族の助けがあるから安心できた＞＜上の子どもたちと赤ちゃんの良い関係＞＜家族に見守られて出産できた＞の3つのサブカテゴリから構成された。

4) 助産師のこだわりに対する共感

【助産師のこだわりに対する共感】は、＜助産所の食事に共感＞＜アメニティに共感＞の2つのサブカテゴリから構成された。

5) 出産の満足感

【出産の満足感】は、＜また助産所で産みたい＞＜自然だったので身体が楽・回復も早い＞＜出産は良かった＞＜出産スタイルに満足＞＜自分の子どももここで産んでほしい＞＜会陰に傷がないので痛みもない＞＜みんなこうやって産めばいいのと思う＞＜ここで出産して良かった＞の8つのサブカテゴリから構成された。

IV. 考察

1. 助産所出産選択の意思決定要因

今回A助産所での出産を選択した経産婦は、＜医療行為の結果への疑問＞＜医療行為の否定＞＜病院でのケアシステムへの疑問＞＜バースプランとの相違＞＜出産準備クラスへの不満＞といった【病・産院の医療に対する疑問】を感じていた。『WHOの59カ条お産のケアガイド』⁷⁾の出産ケアとして“明らかに害があったり効果がないのでやめるべき事”と提示されている「出産中、慣例的に静脈点滴を行うこと」や「産婦を慣例的にあおむけの姿勢にすること」を過去の出産時に体験し不満を感じて、それが【病・産院の医療に対する疑問】につながっていた。また、経産婦の過去の出産では、妊娠中に思い描いていた出産までの道筋と実際とに相違が生じており、今回、病・産院の出産でなく助産所出産を選択して、【思い描く出産】を実現したいと考えていた。

【思い描く出産】の実現場所選択では、＜助産所自体への興味＞から助産所出産を検討し、実際に＜出産した知人からの情報＞や＜HPを見て＞＜助産所の見学をして＞、主体的にA助産所での出産を選択していた。また、経産婦が【思い描く出産】の実現場所である助産所は、＜入院期間の

短縮等の融通が利きそう>なことや正常分娩のみを取り扱う助産所ならではの<医療行為をしない>こと、<民間療法的なものに興味を持って>選択され、【思い描く出産】は、<自然に産みたい><布団の上で産みたい><家族の立ち会い出産をしたい><生まれてくる子どもの力を信じて産みたい><自分の力を信じて産みたい><思い出に残る出産をしたい><家族みんなで子どもを迎えたい><夫や子どもに臍帯を切ってほしい>と、具体的かつ主体的で目的意識を持ったものであった。これは、助産所出産を選択する妊婦は出産に対して目的意識が高く主体的である^{2~3)}とした先行研究と同様であった。

2. 助産所出産の体験の振り返り

A助産所では、妊娠期は通常、管理者である常勤助産師1名がケアを行っている。それにより妊娠期から一貫した支援が可能となり、出産時の<助産師の対応に満足><助産師のケアはイメージ通り><安楽ケアに満足><1人の人(助産師)にすべてを相談できた>といった【助産師への信頼】がうかがえる発言につながった。先行研究では、「継続的で一貫した支援を提供することで助産師への安心感・信頼が確固となり、妊産婦が主体的な出産に向けて行動していた」⁸⁾、「妊婦にとって信頼のおける助産師が、出産に向けて心身を整えていくことの重要性を繰り返し説くからこそ、妊婦は少しずつ主体的に妊娠・出産に取り組もうと自覚を持つ」⁹⁾と述べている。信頼できる助産師が傍らにすることで、産婦は自らが【思い描く出産】に向けて主体的に取り組むことができるのである。

また経産婦は、妊娠期からの【思い描く出産】に向けての主体的な取り組みから、<今までも順調だったし、赤ちゃんも元気に違いないと思った>と【自信】を持ちながら出産して、出産後は自分には<産む力があった>とさらに【自信】を深めていた。自信は、自分自身の能力を信じることである。二川¹⁰⁾は、「自分の力を全活用せずに妊娠・出産を終えることは、女性の人間的な成長・新しい自分の獲得を抑制することにもつながる」と述べており、自分を信じ、主体的に出産に取り組んだ女性は、人間的に成長できることを逆説的に示している。

さらに、経産婦が自信を持っていた背景には、家族の支えもあった。【家族との良い関係・時間】では、<家族の助けがあるから安心できた><上の子どもたちと赤ちゃんの良い関係><家族に見守られて出産できた>と夫や子どもたちが出産に立ち会うことで得られる安心感も語られた。

そして、【助産師への信頼】や【自信】、【家族との良い関

係・時間】を持っていたこと、食事や助産所のアメニティの中に見出した【助産師のこだわりへの共感】が、<また助産所で産みたい><自然だったので身体が楽・回復も早い><出産は良かった><出産スタイルに満足><自分の子どももここで産んでほしい><会陰に傷がないので痛みもない><みんなこうやって産めばいいのと思う><ここで出産して良かった>といった【出産の満足感】にもつながっていた。鈴木³⁾は、出産の満足感につながる因子として、「出産に関する環境」「お産の経過」「精神的サポート」の3つを挙げている。今回の調査でもA助産所という環境や【思い描く出産】が実現でき、出産を振り返った時にその経過を客観的にプラス評価できたこと、助産師や家族の精神的サポートを受けられたことが、【出産の満足感】につながったと考える。

これらのことは、病・産院等の出産であっても妊産婦の出産についてのニーズを受け止め、その希望に寄り添ったケアを妊娠期から一貫して、可能であれば同じ助産師が行い、産婦が家族の見守りやサポートを受けながら出産することが出来れば実現できる。一人の女性が一生のうちに体験する出産数は少ない。病・産院等では施設の規模や医療者の勤務形態など様々な制約があるだろうが、多くの女性が人生の中の数少ない出産を満足できるようもっと工夫できると考える。

V. 研究の限界

本研究は、B県内の一助産所での出産を選択した女性への調査であり、症例数も少ないことから、導かれた結果には限界がある。

今後は研究の症例数を増やして、本研究の信頼性や妥当性を高めたいと考える。

VI. 結論

一施設での調査ではあるが、助産所出産を選択した要因として、前回出産時の【病・産院の医療に対する疑問】から【助産所に関する情報】を収集して、自らが【思い描く出産】の実現場所として主体的に助産所出産を選択するという研究参加者の出産に対するこだわりから助産所出産の選択をしていた。

助産所での出産は、妊娠期からの助産師と築いた良い関係をもとに【助産師への信頼】が生まれ、主体的に出産することで【自信】にもつながり、助産所でのゆったりとした時間の流れは、出産前後の【家族との良い関係・時間】をもたらしていた。また、食事やアメニティに対する【助

産師のこだわりへの共感】が一様にあった。そして、これらのことが総合的に助産所【出産の満足感】につながっていた。

謝辞

本研究にご協力頂いた妊産褥婦の皆様に深く感謝いたします。

尚、本研究の一部は、第55回日本母性衛生学会で発表した。

表1 助産所出産選択の意思決定要因

カテゴリー	サブカテゴリー
病・産院の医療に対する疑問	医療行為の結果への疑問
	医療行為の否定
	病院でのケアシステムへの疑問
	バースプランとの相違
助産所の情報	出産した知人からの情報
	助産所自体への興味
	H Pを見て
	助産所の見学をして
思い描く出産	自然に産みたい
	布団の上で産みたい
	家族の立ち会い出産をしたい
	子どもの生まれてくる力を信じて産みたい
	入院期間の短縮等の融通が利きそう
	自分の力を信じて産みたい
	民間療法的なものに興味を持って
	医療行為をしない
	思い出に残る出産をしたい
	家族みんなで子どもを迎えたい
	夫や子どもに臍帯を切ってほしい

表2 助産所出産の体験の振り返り

カテゴリー	サブカテゴリー
助産師への信頼	助産師の対応に満足
	助産師のケアはイメージ通り
	安楽ケアに満足
	1人の人(助産師)にすべてを相談できた
自信	産む力があつた
	今までも順調だったし、赤ちゃんも元気に違いないと思った
家族との良い関係・時間	家族の助けがあるから安心できた
	上の子どもたちと赤ちゃんの良い関係
	家族に見守られて出産できた
助産師のこだわりに対する共感	助産所の食事に共感
	アメニティに共感
出産の満足感	また助産所で産みたい
	自然だったので、身体が楽・回復も早い
	出産は良かった
	出産スタイルに満足
	自分の子どももここで産んでほしい
	会陰に傷がないので、痛みもない
	みんなこうやって産めばいいのと思う
ここで出産して良かった	

文献

- 1) (公財) 母子衛生研究会：母子保健の主なる統計 平成25年度刊行. 母子保健事業団、2013.
- 2) 篋伊久美子、二瓶良子他：妊婦の主體的な出産に関する意識調査. 母性衛生、43(1)、178-187、2002.
- 3) 鈴木敬子、大町寛子他：女性が出産に望むこと－助産院での調査より－. 母性衛生、44(1)、98-104、2003.
- 4) 鈴木静、高橋弘子他：フリースタイル分娩をした産婦の分娩の達成感. 母性衛生、46(4)、625-632、2006.
- 5) 竹原健二、野口真貴子他：助産所と産院における出産体験に関する量的研究－‘豊かな出産体験’とはどういうものか？－. 母性衛生、49(2)、275-285、2008.
- 6) 長谷川文、村上明美：出産する女性が満足できるお産－助産院の出産体験ノートからの分析. 母性衛生、45(4)、489-495、2005.
- 7) 戸田律子訳：WHOの59カ条 お産のケア 実践ガイド. 農山漁村文化協会、東京、1997.
- 8) 柴田真希：助産所出産を選択した経産婦の意識や行動. 日本母子看護学会誌、6(2)、21-30、2012.

- 9) 竹原健二、岡本菜穂子他：助産所で妊婦に実施されているケアに関する質的研究－助産所のケアの‘本質’とはどういうものか－. 母性衛生、50(1)、190-198、2009.
- 10) 二川香里、永山くに子：妊産褥婦の主体的な取り組み－助産院での縦断的面接を通して－. 母性衛生、46(2)、257-266、2005.

(平成27年1月28日 受理)